

教職員研究チーム活動状況報告書

代表者の所属・職・氏名	明石市立 明石養護学校	研究チーム名 (明石特別支援教育研究会「明石の会」)
	職・氏名 教諭 西本 章江	

研究テーマ分類番号 (8)

(1)研究テーマ
発達障がいのある園児児童生徒への教育的支援のあり方を考える。
(2)研究経過及び具体的な取組
<ul style="list-style-type: none"> ・ 5月18日(火)講演会「特別支援教育における保護者への支援」 講師：兵庫教育大学 大学院 准教授 内容：お話を聞いた後、保護者との懇談場面を想定し、4～5人のグループを作って、保護者・担任・コーディネーター・管理職の役割になり、ロールプレイを行い、話をしてみてどのように感じたか感想を出し合い、良い点、改善点について話し合った。 成果：参加者(研究チーム10名、その他15名)実際にロールプレイで、それぞれの役割を演じることで、考えを深めることができた。 ・ 6月18日(金)講演会「読み書き専門外来で困ること」 講師：高砂市立高砂市民病院 言語聴覚士 内容：「教科書の内容が理解できない」「数学の文章題が解けない」などは、言語性の意味理解障害が存在する場合がある。支援の方法としては、個別指導の導入、得意な認知特性を活かした従来の学習方法と異なる学習を行う、板書を減らす、宿題の方法と量を加減する、解き方を教えてパターンで問題を解く、意味調べと要約などに取り組む。視覚認知障害が疑われる場合は、聴覚経路を利用した学習方法(聴覚法)を提案する。 上手くいかない事例として、保護者の問題、学校側の問題、医療(支援)の限界などが考えられる。読み書き外来の最終目標は、「自分でお金を稼ぐ」ことができるようにすることを目指している。そのためには、「自尊心を保つ」「社会性」が必要。読み書き外来だけでは、学力は伸びない。先生方との連携が全てだと考えている。 成果：参加者(研究チーム10名、その他24名)LDのある子どもの学校での早期発見と早期支援の大切さを学び、病院の言語聴覚士と連携することで、さらに効果的に支援していけることが分かった。 ・ 7月2日(金)事例検討会(LDのある小学生を中心に) 内容：小1男子の事例検討(主訴：「本が読めない」「漢字が覚えられない」) カタカナを書けるようにする。漢字につながる。「ア アイウエオ、アカ カキクケコ・・・」というふうに唱えて、50音の系列再生を指導してから書かせる。等 聴覚法で漢字を唱えながら書く。「空」「ウ」「八」「エ」と唱えて覚える。 学習方法の検討(意味理解障害への対応)国語・・・意味調べや内容の要約を読むなど、予習に力を入れる。算数・・・解き方を教えてパターン化する。 成果：参加者(研究チーム10名、その他14名)6月の講演会で聞いた内容を活かして、支援方法を考えていくことができた。 ・ 9月22日(水)事例検討会(LDのある中学生を中心に) 内容：中1男子の事例検討(主訴：「漢字が書けない」「努力の割に成績が伸びない」) ノートや作文などの資料を参考にして、支援策を検討した。 知的な水準にも配慮して、基礎的な学習に重きを置くことを考える。 進路を見据えて、できることを伸ばしていく。 成果：参加者(研究チーム10名、その他14名)中学校で支援できる体制を含め、総合的に支援を考えていくことができた。参加者は、インシデント・プロセス法でグループ討議をし、積極的に意見を出し合った。 ・ 10月13日(水)講演会「発達障がいのある青年・成人への支援」 講師：兵庫教育大学 大学院 准教授 内容：事例として、30歳の高機能広汎性発達障害のBさんについて、グループ演習を中心に行った。「当事者に関する情報で得たいこと・得るための方法の整理シート」についてまず考え、グループで意見を出し合った。次に、「当事者の抱える問題に対する目標案とその支援案の整理シート」を使って、問題解決案や解決に向けた支援案を考え、話し合った。発達障害の特性を支援者が理解して支援していくことの大切さや自己認識を深めていく必要性についても講義していただいた。 成果：参加者(研究チーム10名、その他5名)グループ演習することで、参加者が積極的に意見を出し合って、問題点について考えることができた。自己認識を持って、就労へ向かうことの必要性を感じた。